短編「怪火」「仇野（あだしの）の露」

柳沼昭徳

怪火

京都市上京区の御所南にある分譲マンション、２ＬＤＫの二階。

猛暑。開け放ったベランダから見える堺筋通りの街路樹が熱風にさらされてもだえている。大久保恒はリビングでじっと、余分な熱を発さないように寝転んでいる。

何もしない休日の昼間、恒は頭を敷いた湾曲した腕を見て、ふと昔のことを思い出す。

恒　昔、子供の頃、六歳か七歳の頃、タンスの引き出しを、こう、階段みたいに段々に引き出して、その上から飛び降りるっていうことが好きで、そういうことをして遊ぶのが好きな子供で。親もそれを笑って見てるような、そんな親で。

あるとき頭から落ちてしまって、とっさにかばった腕を折ってしまって。見たら曲がったらあかん方向に曲がってて。泣いて泣いて。

うちの母親は何を思ったか、かかりつけの接骨院に連れていって、整形外科とかじゃないから綺麗にくっつくかどうか分かりませんと言われて。僕の腕は曲がったまんまで。

ある日、母親がこの腕をぼんやり見ていることに気づいた。その視線に気づいて僕が見返すと、とっさに母親は目をそらした。

ゆっくりと捨てられる感じがしました……

恒の携帯電話が鳴る。

恒　はい、あお世話になりますぅ。ええ。はい暑いですねはいはい。あのぅどう（です？）はい。

はぁはぁ。え、あ登記の方は先日郵送でそちらにね……はぁはぁはぁ。……えーて言うかいるんですか？

はい。住民票は聞いてないですね、はい。聞いてないです。だいぶん二度手間ですよねぇ、いえまぁまぁねぇ？郵送もタダと違いますしねぇ？

あのぉねぇ？　急いでるってねぇ？　この前も言わせてもらいましたしね？　こっちは送ったでしょ？　まぁそちらから届いたって連絡もありませんでしたけど。

いやいやいやいやあのね、山本さんね、言い方がおかしいでしょうが、こっちは客でしょうが、私おたくがいわれる通り送りましたでしょうが、不備不備ってね、こっちが悪いみたいな言い方されてもねぇ？　心外でしょ。で、それで？　買い手って見つかりそうです？

はい、はい。仰ってましたもんね。でもね、御所南ですよ？　人気あるでしょう？　ある言ってはったしね、ええ、

でもまぁ一日でも早いほうがいいんで。
ええ。大体いつ頃なりそうです？　……

そこへ妻、澄恵が帰宅する。
恒は少し驚く。

恒　はい。じゃあ連絡もらえます？　また。

恒、電話を切る。

澄恵　ただいま。

恒　おう。

澄恵　え？　売れたん？

恒　え？

澄恵　その電話。（床を指差し）マンション。

恒　もう帰ってこうへんと思ってたわ

澄恵　荷物残ってるやん。

恒　まぁそらそうやけど……

澄恵、去る。うがいをする音が聞こえる。

恒、台所の方を伺う。シンクにたまった食器を気にする。

澄恵、戻ってくる。

恒　いや、洗い物溜まってんのや。

澄恵　やるわ。

恒　いや、やるやる。

澄恵　（ベランダを見て）洗濯物入れといてって……

恒　うん、ごめん。

澄恵は恒の呼び掛けに応えることなく、洗濯物を取り込みはじめる。

恒　カラカラになった洗濯物が揺れていました……

十五歳になって、父親が家を出たことがきっかけで僕は高校をやめて京都で一人で暮らし始めました。仕送りをもらいながら、アルバイトをしながら単位制の高校に通って、そして十八歳の時、京都コンピューター学院に入って、イ

ンターネットで健康食品を売る会社に就職できました。
良い時代でした。休む暇こそありませんでしたが、何かを工夫するでもなく、策略をめぐらすこともなく、たくさんの仕事をして、たくさんのお金が手に入りました。

（澄恵に）畳もうか？

澄恵　……（澄恵は聞こえない）

恒は部屋に放り込まれる洗濯物を手にとって畳み始める。

澄恵がちらとその姿をみとめる。

恒　僕がその会社で働き出して三年が経とうとしていました。その頃と言えば、世の中はちょうどＩＴバブルと呼ばれる時代でした。吉祥院にあった小さな事務所も、御池の東洞院にあるオフィスビルのワンフロアに移りましたし、たった十二人だった従業員もいつしか二十九人を抱える会社に……

澄恵が洗濯物を取り込み終わって、部屋に入ってくる。汗を拭い、胸元をはためかせながら。洗濯物を畳み始める。

恒　下（した）、警察、車停まってへん？

澄恵　ううん

恒　そっか

澄恵　……暑いしクーラーつけていい？

恒　電気代もったいないし。

恒、路上で配布されていた企業宣伝のうちわを差し出す。

澄恵　うん。（洗濯物を畳む手を止め、うちわを仰ぎながら）あ、ええよ。自分のだけ畳んでくれたら。

恒　あのさ

澄恵　はい。

恒　一応聞いとくけど

澄恵　（すかさず）一応って？

恒　……泊まってくるんやったら連絡とか

澄恵　はい。

恒　分かるけどさ……まぁまだ一緒に住んでるわけやし

澄恵　うんわかってる。ごめん。

恒　心配するし

澄恵　……（恒がより分けた洗濯物を畳み始める）

二人、洗濯物を黙々と畳んでいる。

澄恵　結婚式。

恒　ん？

澄恵　ミドリいたやん？　短大の時の

恒　おう。

澄恵　ミドリ結婚してん。

恒　まだ結婚してなかったんや。

澄恵　あれ、あそこで、大阪のリッツ

恒　へぇリッツ・カールトン？

澄恵　そう。二百人ぐらい来てたわ。

恒　へぇ俺ら負けたな。

澄恵　言うと思った。

恒　そんなん別にお前行かんでも良かったんと違う？

澄恵　私らの時、二次会やってもらったやんか、何もせんいうわけにはいかんわ

恒　祝儀どうしたん？

澄恵　まぁ。とっといたやつがあったし

恒　へぇ……

澄恵　友達とかはほら、ちゃんとしたいやん。

恒　……（苦笑いをするが）あ、紙は。もう出した？

澄恵　えなんで？

恒　はよ出しといてや。

澄恵　置いて出たし。

恒　出しにいく？

澄恵　一緒に？　婚姻届じゃあるまいし。

恒　いや、結構いるらしいで？

澄恵　そんなん聞いた事ないわ。離婚届やで？

恒　けじめつけたいのと違うか？　ふたりで。

澄恵　（苦笑する）……。

恒　土日ってやってんのか？

澄恵　え？

恒　婚姻届は土日でも受け付けてくれるけど

澄恵　さぁ知らん。そうと違う？

洗濯物を畳み終わった澄恵は、自分の洗濯物を手にして立ち上がり、クローゼットに向かう。

床には恒の洗濯物が置かれている。

恒、うちわを仰ぎながら、スマホで上京区役所の時間外窓口について調べはじめる。

恒　（電話を繰りながら）勤めていた会社の社長は、そんな時代がくる前から世の中がこうなることを予想していました。僕と同じ専門学校出の裸一貫で会社を立ち上げ、徐々に規模を大きくしていく様を間近に見て、どんどん成功していく社長を僕は尊敬していました。

確かに、大きな外車を乗り回したり、二週間に一度アルマーニのスーツを買ったり、しょっちゅう祇園に繰り出したり、そう露骨に派手に振る舞う姿はあまり好きにはなれませんでしたけど、その高いバイタリティーは周りにある種のあこがれを感じさせました。

簡単に言うと、この人に付いていこうと思わせるそういう雰囲気の強いひとでした。

ああ……

恒、該当の情報を見つけ、携帯に見入る。

澄恵、戻ってくる。

澄恵　あった？

恒　どれやろ？

澄恵　（洗濯物）しもとこか？

恒　わかりにくいな。もう聞いたろ（電話をかける）

澄恵　別に今やのうても……（またうちわを仰ぐ）

恒　……あすいません。ちょっとお伺いしたいんですけどね、あのぅ離婚届って、土日とか夜間でも受け付けてもらえるんですかね？
はい、あそうですか、え土日の夜間でもいいんですか？あそうですか。いえ、あもう書いてあるんで、ええはいそれもう聞いてますんで、はいありがとうございます。はい、はい、はい。（電話を切る）
うん。

澄恵　ほな出してくるわ。

恒　え？

澄恵　なに。

恒　いや

澄恵　え？

恒　俺出しに行くで

澄恵　うん。

恒　行ってくる？

澄恵　いや、どっちでもええけど。まだまとめなあかん荷物残ってるし。

恒　ええよええよ。今日の晩は？　バイトは？

澄恵　うんある。

恒　だからええよ行ってくるわ。何日か外出てへんしな、散歩がてら。

澄恵　えっ、車ってもう

恒　（あっけらかんと振る舞う）うん売れたしもう持っていかはった。

澄恵　……あほんまに。

恒　明日か明後日に入金あるって。

澄恵　ほんまに。

恒　（笑って）ローン終わってて良かったわ。

澄恵　うん。

恒　まぁまぁまぁ俺行ってくるし。行ってくるわ。

澄恵　もう今から？

恒　え？　いやもうちょっとしてから、日暮れてからでも。暑いしな。

澄恵　ほな上から二番目の引き出しに入れてるし。

恒　うん。

澄恵　あ何時ぐらい？

恒　そやなぁ……えなんで？

澄恵　いや、フレスコ（スーパーの名）寄ってきてもらいたいなって。

恒　おう

澄恵　そうめんもう食べた？

恒　食べた

澄恵　ほならそうめんと……また書いとくけど

恒　おう

澄恵　持ち合わせある？

恒　えまぁあるんとちが

澄恵　また渡すわ。

恒　おう。

澄恵　また出るとき言うて。

恒　はい。

澄恵　（洗濯物）しもとこか？

恒　いや、いい。

バツの悪くなってきた恒、逃げるように洗濯物を持ってクローゼットに向かう。

澄恵、うちわを仰ぐ手が止む。

澄恵　……さっき、京阪を神宮丸太町で降りて、地下からあがってくると、川端丸太町の交差点をサイレンをならした消防車が熊野神社の方へと走っていきました。するとすぐにサイレンが鳴り止みました。周りの人たちと同じように私がその方を見てみると、交差点から東に五〇〇メートル。丸太町通りに面した木造の一軒家から火が上がっていました。

遠目に、住人らしい人と、消防車から降り立った消防隊員がせわしなく走り回っていました。私の周りの人々は「火事や」とか「あ燃えてる燃えてる」と騒いでいました。こんな時、人は見たまんまのことを言うんやなと私は思いました。

そのうちの何人かは火事を見物しようと現場の方へ、人だかりの中へと走っていきました。私はその騒ぎを川端丸太町の交差点から眺めていました。

そのうち、二台、三台と目の前を消防車と救急車が走り去っていきました。「ちょっと大ごとやな」と思いました。

いつしか、私の足は、野次馬の方へと向かっていました。

恒、離婚届を手にして戻ってくる。

恒　これって他に書類いらんの？

澄恵　……いらん、と思う。

恒　このまま持って行ったらええの？

澄恵　うん。

恒　むき出しでええの？

澄恵　婚姻届もそやったし。

恒　ふうん。

澄恵　ここで荷造りしてもいい？

恒　え？　まぁいいけど

澄恵　なに？

恒　いや、段ボールだらけになるなって思って。

澄恵　そうやね。ほなええわ……

恒　……

澄恵　……

恒　（澄恵のなにか言いたげな間に苛立って）なんやねん。

澄恵　逃げた方がいいんとちがうかなって。

恒　なにがやねん、ええねん、もう。

澄恵　別に待ってんでも。

恒　ええねんて、腹決めたし。

澄恵　でも

恒　て言うかなんで戻って来たんよ。

澄恵　荷物まだあるし

恒　（語気を強めて）そんなん後からなんとでもなるやんけ

澄恵　いや……うん、ごめん。

澄恵、額の汗を拭いながら、部屋を去る。

少し息の荒い恒、床に広げた離婚届を見つめながら

恒　会社が上場してしばらくして、僕は通販セクションのプロダクトマネージャーというポジションについていました。色んな会社からヘッドハンティングをして、大卒の有能な人材が会社にやってきました。そして、それまでやってた健康食品の小売りから、事業拡大をはかりました。

　やがて、自社のブランドで化粧品とか美容液とかを開発する商品開発部という部署ができました。それと同時にもう一つ、消費者に広く商品を販売するためのマーケティング企画室という部署もできました。つまり、作った商品開発部で作った商品を、マーケティング企画室で販売する流れをつくりました。社長は例の辣腕をふるって、半年足らずで新しい事業を黒字にしました。

　そんな風にどんどんと会社が大きくなっていったので、社長とも前よりあまり話せなくなっていましたし、会社の規模が大きくなればなるほど、周りは頭のいい優秀な人たちで溢れてきて、専門学校出の僕は肩身の狭い思いをしていました。

そんな時、４年ほど前、「大久保、飯行くぞ」
木屋町にある「圓」という焼き肉屋の個室に僕は社長に
連れて行かれました。

澄恵　ちょっとっ

恒　……なに？

トイレの方から、澄恵の声がする。

澄恵　ちょっとっ

恒　（大声で）なにっ？

澄恵　ごめんっ

恒　（苛立って）なんやねんっ

澄恵　紙。ないねん。

恒　……

澄恵　ごめん。紙取って。

恒、トイレの方に向かう。

恒　ない

澄恵　えっ？

恒　紙ない

間

澄恵　ほな箱のティッシュ持ってきて。

恒　……

恒、部屋を横切って、玄関の廊下にあるクローゼットから、ティッシュの箱を取りに行く。

恒　ちっ。

恒は、舌打ちをしながら部屋を横切って、澄恵の待つトイレに向かう。

恒が乱暴にノックをする音。

澄恵　（トイレの中からの声）ごめんありがとう。

恒　……ちっ……ちっ……ちっ……ちっちっ（と、舌打ちしながら部屋に戻ってくる）

（突然大仰に）「大久保、お前に会社一個やろう」

突然、社長は僕に言いました。僕はびっくりしました。社長の鞄の中から、浄水器のパンフレットを出てきました。そこにはアルカリイオン水が如何に体にいいものかということがびっしりと書かれていました。社長によると、そのうちテレビでも取り上げられる。ということでした。

簡単な話、社長としては別に会社を作って、この一台三十万円するアルカリイオン水の浄水器を販売したい。その社長にならないかという話しでした。

「僕でいいんですか？」

不安になってそう訊ねると、社長は豪快に笑ったかと思ったら急に息を潜めて

「俺はお前にやらせたいんや」

そう僕に言いました。

恒、マイクを持つフリ。

場が一転する。

恒　「えー皆さん、水道水がいかに危険かということを分かっていただいたと思います。

今日、沢山いらっしゃった若い奥様がた。特に、私が声を大にして言わせていただきたいのが、これから、赤ちゃんを産んで、育んでいこうとされている、そんな皆さん。

いいのでしょうか？　毎日食べる食べ物、飲み物、そして毎日の入浴に、欠かさず使用する水道水によって、日々汚され、そして健康を害しているのです。

はいそこのあなた、先程のＶＴＲで人間の体を構成する何パーセントがが水でできているとありましたでしょうか？

そうです。大正解です。およそ六十パーセントが水でできているのです。そうなんです六割が水でできているのです。

どうか今日はお家に帰って、水道水が危険な物体であるかということをご家族にお話ししてあげてください。決して私たちは、ここでこの浄水器「アルカリーナ・アルファ」を買えなどということは申しません。なぜなら、私たちに

とって、日本に暮らす人々、いえいえ、世界の人々が健康であることが私たちにとっての最大の利益なのです。商品ではなく、知識、正しく生活をして、健康に暮らす知識を私たちは広めたいのです。

どうか、私たちのこの考え方にご賛同いただけるのでしたら、まずっ。まずは私たちの仲間に、会員となってください。そして仲間であることを世に大きな声で訴えてください。みなさんの健康を願う真摯な声は、一人、また一人と繋がっていくはずです。いいですか？　大切なのは情熱なのです。

皆さん。ご家族で行かれる外食を三回我慢なさってください。一万五千円。このわずかな入会金で、一生の健康が得られるのですっ」

澄恵　ウーーッ……

パトカーがやってきて丸太町通りの片側車線を封鎖しました。火が消える様子はありませんでした。それどころか炎は巨大な生き物のように、放水の水をもろともせず圧倒的な勢いで燃えさかっていました。道の反対側にいる私は照り返す夏の日差しを上回る炎の熱気と木やプラスチックの燃える匂いむせかえるようでした。周りの住人たちは皆建物から外に出て、消防隊員に「ここから火出てるっ」

「隣の郵便局誰か電話したんかっ」と叫んでいます。その前をノロノロと通り過ぎる車、燃えさかる炎に携帯のカメラを向ける野次馬に警察官がひっきりなしに叫んでいます。

「下がってください！　下がってください！」

恒　社長は僕と境遇は同じでも、やっぱり器が違うなと思いました。大学なんか出てんでも、やっぱり頭のええ人は違うと思いました。やっぱり間違いはありませんでした。浄水器は売れました。と言うより、正確にはセミナーに参加して、会員となった人たちの手によって売られていきました。僕の会社には沢山のお金が入ってきました。社長は

「お前は成功したんや。」

そう言いました。やったった！

僕は一般的に見て、高い水準の生活ができるようになりました。社長は、勢いのあるうちにしておくことがあると言ったので、会社で出会った澄恵と結婚もしましたし、気は進みませんでしたが、社長が勧めるままアルファロメオや、御所南の新築マンションを買いました。

僕はもっとも幸せでした。いや、幸せだったんです。

澄恵　パンッ！

という何かがはじける音がして、時折炎が高く上がりました。

「おーっ」

人々はとどよめきました。パンッ！

「おーっ」

私は、いっそのこと、あの人もろとも、この圧倒的な炎で燃えてしまいたいと思いました。マンションも車も、アホみたいやと思いました。

「おーっ」

そうですっ！　アホなもんは燃やさなあかんと思いました！　そしてアホなもんをほしがった私らも同じように燃えてしまわなあかんと思いました！　ごめんなさいっ！　私っ、その火っ、ホンマに消えてほしなかったんですぅ！　そのまま燃えて燃えて私、燃やして欲しかったんですっ！

（恒の身体をつかみ）あんたっ、逃げっ！

恒　こんなことなるなんて思ってなかったいうのは嘘です。正直いつかこうなるって思ってました。

澄恵　なぁあんた、逃げて！

恒　いくら学がなかっても専門学校出言うてもその程度のことなら分かります。四年前、社長に、高い焼き肉屋に連れて行ってもろて「お前のこと買ってる」言われただけで、気ようして「ようし儲けたろうっ」て思たんです。人騙して浄水器売るんやなって分かってたんです。ようようわかってたんです。

澄恵　逃げてっ。

恒　そやけど、ようわからんのです。僕、誰のために儲けたかったかわからんのです。いや、ほんまにね、何がそんなに欲しかったんか、考えれば考えるほどようわからんのです。高級マンションも外車も高い家具も、そんな欲しくなかったはずなんです。いったい僕は

澄恵　なぁって

そこに、インターフォンが鳴る。

二人　……（その音にはっと振り返る）

インターフォンが鳴る。

ドアを叩く音。

二人、寄り添う。

おわり。

仇野の露

［1］

大阪府寝屋川市、京阪香里園駅にほど近い２ＫＫ―ポ。
夏の午後六時半過ぎ。
クーラーのついた部屋の窓は閉め切られている。まだ外は明るく、室内に電灯は点っていない。
老夫婦、原田孝夫（以下・孝夫）と原田美智子（以下・美智子）が向かい合って食事をしている。
今日の献立は、親子どんぶり、わかめとタマネギの味噌汁、作り置きの目ひじきの炒め煮。
そして、孝夫の前には紙パックの日本酒とコップ、美智子は冷えた番茶が置かれている。
テレビがある。
夕方のＮＨＫニュースが、スキャンダラスな政治の話題、残忍な殺人事件の話題を流している。
しかし、二人はそれに特に興味を持つことはなく、ちらっと目をやる他は、主に箸を進めている。

孝夫　テレビ、買い換えなあかんな……

画面の右上の「アナログ」表示を見て、孝夫はつぶやく。

美智子　……（反応することなく箸を進める）
孝夫　昨日な、ジョーシンさん行ったんやけどな、最近のはバカでかいのばっかりで、ええ値するんや。
美智子　どれくらい？
孝夫　えらいでかかったで。三十二インチいうのが（腕を広げて）こんなくらいで、
美智子　お値段よ。お箸置いてやって。
孝夫　シャープのやつが七万言うてな。
美智子　……（美智子、ため息を吐く）
孝夫　なんやポイント言うの使ったら一割は安なる言うてな。
美智子　いくらになりますの？

孝夫　そやし……六万

美智子　……（反応しない）

孝夫　そやかてな、これ見られんようになるらしいしな。困るやろ？

美智子　……

孝夫　なぁ？　のうなったら困るわ。

美智子　……

孝夫　（コップの酒をあおって、少し考えて）……年金飛んでまうわな。

二人、黙々と、箸を進める。
しばらくして、ローカル情報のコーナーになる。

テレビ　太平洋戦争中の第一次大阪大空襲から六十五年目を迎える今年、市民が撮影した空襲後の写真などが展示される催し、『特別展「焦土大阪～写真で見る大空襲」』が大阪市中央区にて開催されています……

美智子が箸を止め、口を動かしながらテレビを注視する。

孝夫は美智子の様子を少し伺うが、箸を進めつつ、テレビに目をやる。

テレビ　戦時中の大阪は一九四四年末から翌年八月の終戦の前日まで、八回の大空襲を含め約五〇回の空襲の被害を受け、約一万五千人が犠牲になったとされています。中でも、終戦の一九四五年三月の大空襲は、大阪の中心市街地を狙った初の、夜間大規模焼夷弾攻撃で、浪速区をはじめ、西区、南区・東区、西成区、天王寺区などが一夜のうちに焦土と化しましたた。

催しでは、空襲後、市民が焼け野原となった道頓堀一帯を撮影し、近年新たに市民から提供された被災写真を含む約百枚の写真やパネルが展示されています。

孝夫　（画面を見ながら）……これ、動物園と違うか？

テレビ　……催しに訪れる見学者の中には、当時被害にあったというお年寄りもおり、「当時の惨状をありありと思い出す」「未来のためにも、私たちは語り継いでいかないといけない」と熱心に写真に見入る姿が見受けられます。

美智子と孝夫は、再び椀に目をもどし、箸をすすめようとする。

テレビ　……この催しは八月十六日まで、大阪中央区の大阪国際平和センター「ピースおおさか」にて開催されています。開館時間は午前九時半～午後五時、来館料は無料です。

二人　……

孝夫はコップに残った最後の一口をあおり、何かを結論づけるかのように

孝夫　わざわざ観に行かんでもよろしい。なぁ？

ごちそうさんでした。

美智子　……

美智子、箸を止め、椀を見つめている。

孝夫　もうごちそうさんか？

美智子　あと一口が食べられへんわ。

孝夫　下げようか。

美智子　ごちそうさんでした。

孝夫　今日のはようできたな？

美智子　おいしかったわ。

孝夫　最後の醤油ひと差しが効いたな。

美智子　ごちそうさんでした。私やるわ。

孝夫　ええ、ええねんや。

と言って、孝夫、床に置かれているお盆とふきんを手に取り、

孝夫　拭いてくれるか？

美智子　はい

孝夫　下げますさかいにな……

孝夫、お盆に食器を載せながら「サム・サンデー・モーニング」を口ずさむ。

美智子　なんです？

孝夫　懐かしいやろう？

美智子　なんでまた？

孝夫　なんや頭の中ぐるぐる回っとるんや。

美智子　ふふ

孝夫、なお口ずさみながら立ち上がり台所に向かう。

お膳を拭いていた美智子が、テーブルの一点だけを執着するようにごしごしと何度も擦り始める。

孝夫　……（孝夫、戻ってきて、美智子の様子をみとめる。そして、妻から布巾を奪いながら）……はいはいありがとうさん。

美智子　……（何かを考えている様子）

孝夫、お膳を拭く。

何かしようとする美智子、次に孝夫の空になったコップに酒を注ごうとするが、開け方が分からない。

孝夫　ああ、ええからええから。

孝夫、美智子の手から日本酒のパックを取る。

孝夫　おおきにな。

美智子　……（何か考えている様子）

孝夫　土曜な、謙一、翔太連れて来る言うてたか？

美智子　……（きょとんとする）

孝夫　連れて来るやろうな。翔太はまたあれ、唐揚げ食べたい言いよるやろうな。用意しとかんとな。しかしあかんわな、油もんばっかり食べさせてるしあれ、謙一の体型にそっくりやで。親子してあの腹

美智子　またサークルばっかりやであの子。

孝夫　ん？

美智子　勉強もせんと謙一よ。

孝夫　へ？

と言って、美智子立ち上がり、嬉しそうに電話台に駆け寄る。

孝夫　（察して、立ち上がり）おい……

美智子　（番号をプッシュしながら）あの子、こっちからかけへんと梨のつぶてやし……三五三五……

孝夫　（やめさせようとしながら）こおら。

美智子　（孝夫をかわしながら）そやかてお父さん、あの子サークルサークル言うて、ほんまに生きてんのか死んでんのかわからんでしょう……

孝夫　……美智子さん

美智子　（電話が繋がる）晴海寮さんでらっしゃ、あっ、いつもお世話になってますぅ。十五号室の原田の家の者ですが、どうも、お夕飯どきにすいません。あのお取り次ぎしてもらってもいいですか？

孝夫　はいはい（と受話器を奪おうとする）

美智子　（巧みにかわしながら）いえ原田です。三回生の、ええ原田謙一の母親なんですけれど

孝夫　はい、おらんやろうが？

美智子　いつもすいません。ええ原田です。十五号室なんですけれども……？　（突然、考え込む）

孝夫　（すかさず受話器を奪い）はいはい出ます出ます。（小声になり）ああいつもすいませんね……ええ。ごめんなさいねほんまに。ええ、はいすいません……（電話は切れる。そのまま受話器を握り、美智子に向かって芝居がかったようにして）「あ、おりませんか。そうですか、はぁはぁ、あっまだ帰っておりませんか。」……

美智子　……（孝夫には構わず、テーブルの上にある湯飲みを手にとって、何かを探し始める）

孝夫　「はぁはぁなるほど。それではまた改めます。はい。それでは失礼します。ごめんくだ……」（美智子の様子に気づいて）んなんや？　お茶か？

美智子　……

孝夫　（受話器を置いて、座り）ちょっと待ってや。熱いのがええか？

美智子　冷たいの。

孝夫は台所に向かう。

美智子、湯飲みを持って孝夫の後をついてゆく。

誰もいない間。

麦茶の入ったペットボトルを持ってきた孝夫に、美智子は少し湯飲みを差し出す。

孝夫　こぼれるしな、座り。（美智子を座らせて、湯飲みに茶を注ぐ）

美智子　……（両手で注意深く飲む）

孝夫はテレビに目をやって。

孝夫　ほら見てみ、今の子はみんなええ腹しとる子供ぎょうさんおるわ。おーよう泳ぎよんな。ええ腹しとんのに。

美智子　もうちょっと。（湯飲みを差し出す）

孝夫　お、ええ調子やなぁ（また茶を注ぐ）

美智子　……（同じ動作で飲む）

孝夫、その様子を見ながらふたたび「サム・サンデー・モーニング」口ずさもうとすると

美智子　……（湯飲みを差し出す）

孝夫　……もうそのへんにしとこか。さっきの子らみたいな腹になるわ。（美智子の湯飲みを自分の手元に寄せる）

美智子　……（湯呑を凝視する）

孝夫　（話しをそらすように）今年は翔太の運動会見に行ったらなあかんな？

美智子　（ぼんやりと孝夫を見る）……

孝夫　去年あんたあんなことあったし、今年はな、弁当作って持って行ったろうな。

美智子　行けるんです？

孝夫　行ったろうな

美智子　よう言わんわ

孝夫　何がや

美智子　また仕事言わはるんと違います？

孝夫　ん？

美智子　また仕事言わはるんでしょう？

孝夫　なんやあんた謙一のこと言うてるんか？

美智子　いつも仕事言うて、約束と違うでしょうが。謙一にそんな寂しい思いさせてね、こうやって親子三人で暮らせるだけでもありがたいのに、わざわざ私らみたいな思いさせて。申し訳ないとか思わへんのやろうか。

孝夫　（頭をかいて）あんたは過保護にしすぎや。子供言うもんは

美智子　みんな焼けてしもて、親もおらんようになってしもて、なんも無くなってしもたけど、私ら約束して一緒になったんやないの。仕事が何ですの。

孝夫　（美智子の手をとり、子供をあやすようにして）はいはい分かってます。はい。あんたはよう頑張った。なぁ？　うまいこと育ててくれた。そうやな？

美智子　……（立ち上がってベランダの窓を開け、敷居に座り込む）

外から、京阪電車の踏切や通過音。セミ、車、自転車のブレーキ音、子供の声。など、夕暮れの下町の喧噪がなだれ込んでくる。

孝夫　……（酒を一口飲んで、また頭をかきながらテレビを見る）

美智子　……（さめざめと泣き始める）

孝夫　……（もう一度酒を口に含む）

孝夫、客席をちらと目をやって、恥ずかしそうに語りかける。

孝夫　最近はずっとこんな調子ですわ。

いや、記憶があちこち飛ぶんは、聞いてましたし知ってましたし、覚悟はできてましたけどね。それは別にかましません。

たいがいは子供の話です。私が仕事ばっかりで、まぁ私らの子供の頃のことの、二人とも、どっちも戦争で親無くしてますし、そのこと考えたら、そらぼやいて然りやと思います。私もぼやかれる分には別にかましません。

そやけど、そんな子供の話したあと、こうやって必ず物干しのとこ座って、泣くんですわ。

いや泣くのもね、周りにそのうち能面みたいになるでっ

て言われてたし、それに比べれば別にかましません。ただ、そうしてるとね

美智子　……（子供が泣くように声を上げて泣きだす）

孝夫、立ち上がって美智子の側に座り、肩をさすりながら。

孝夫　私、これがかなわんのです。窓開けてね、外向いてね、誰に向かって泣いてるんかわからんのです。

美智子の泣き声に反応した近所の犬が鳴く。

孝夫　これ美智子。うるさい言うてはるわ。

隣の部屋の住人が壁を何度か叩く。

孝夫　（少し慌てながら）ほら閉めるで、はい入りよし。

美智子　……（窓枠を押さえて嫌がる）

孝夫　（無理に引き入れようとする）これっ

美智子　……

孝夫　（両肩を力を入れて揺らし）これぃっ！

美智子　……（すねたように部屋に入り、子供のように床に伏す）

窓を閉める孝夫。

美智子はぐずっている。孝夫はあやすように、美智子をさする。その手をはねのける美智子。それでも孝夫は止めない。

孝夫　……

また攻防が続く。

孝夫、「サム・サンデーモーニング」を朗々と歌う。美智子の泣き声が大きくなる。

溶暗

［2］

三〇分ほど後。

いびきを立てて眠っている美智子にはタオルケットが掛けられている。

孝夫はテレビに背を向けて酒を飲んでいる。

美智子が目を覚まし、それに気づいて

孝夫　お茶飲むか？

美智子　……

孝夫　明日は早う起きなな？　ケアマネさん来はるしな。

美智子　……（起き抜けでぼんやりとしているが、ぽつりぽつりと嬉しそうに話し始める）京都に行っててん。

孝夫　ん京都？

美智子　行ったでしょう？

孝夫　京都のどこや？

美智子　一緒になる前のことですよ。

孝夫　ん？

美智子　お父さんが仕事についたとき。

孝夫　え？

美智子　嵐山にほら、デートいったでしょう。

孝夫　ええ？

美智子　忘れはったんです？

孝夫　嵐山……

美智子　私夢見たんです。

孝夫　ああ、嵯峨野行った話かいな。

美智子　嵐山。

孝夫　あー京福電車のって行ったな。

美智子、おもむろに立ち上がる。

孝夫　なんや？　便所か？　行けるか？

美智子、答えずに向かう。

再び孝夫が客席に向かって話す。

孝夫　戦争のあとね？　私が岸和田の孤児院を出たのが十六歳。中書島でね、醤油屋やってる遠縁の親戚に引き取られ

ましてね、そこで働きながら高校を出させてもらいました。美智子もね、私と同じ孤児院の出なんですけど、美智子の方は引き取り手はおりませんで、十六歳になって寝屋川の電機部品の工場で住み込みで働いていました。

美智子、手に落花生の袋を持って戻ってくる。そして、机の上にいくつか広げ、一つを割ろうとする、が堅い様子。

孝夫　割ったろう……（落花生を取って、割る）

美智子は、また立ち上がって奥の部屋に向かう。

孝夫　なんや？　便所か？（落花生を口にする）

……まぁお互い、よその家でね、肩身せまい生活をしてるわけでしょう？　そやさかい、七夕やらクリスマスには孤児院に集まってはね、みんなで働いたお金少しずつ出し合ってね、お祭りするんです。私らそれが楽しみでね。

ええ、まぁそういういきさつでね、私ら一緒になったわです。サム・サンデー・モーニングというわけです。

美智子、戻ってきて、部屋の入り口に立っている。日傘とショルダーバッグを持っている。

美智子　……

孝夫　どないしたんや？

美智子　嵐山で電車降りたら、うち、渡月橋のボート乗りたいわ。

孝夫　今日は行かへんで？

美智子　……（日傘を広げる）

孝夫　これ、美智子さん。行かへんよ？　ほらもうこんな暗いでしょうが

美智子　……（部屋をぐるぐると歩き回る）

孝夫　（止めさせようと立ち上がる）ほんならな、今度謙一に車で連れてもらおうか？　な？　翔太も一緒にみんなで行ったらええやないか。（美智子の後ろをついて回る）

美智子　……ボートに乗って、天龍寺のお庭見て、あ、雲龍の絵も見なあかんわ。

孝夫　これ。（美智子を捕まえようとする）

美智子　（孝夫の手から逃れて）フフフ……それで、竹林のあの緑色のトンネル抜けたら大河内山荘。あ、その前に野々宮神社で縁結びのお参りするの、それから、それからそれから二尊院通ってね、嵯峨野巡りするの。

孝夫　（頭をかきながら）よう憶えとるな。そうや、えらい暑かったな。

美智子　せっかくの一張羅がびしょびしょになってしもたね。

美智子、孝夫の服を触ろうとして、やめる。そして照れた様子で再び歩き始める。

孝夫　……

美智子　……（息をはずませている）

孝夫　おい大丈夫か？

美智子　もうちょっと、がんばってね、もうすぐ化野の念仏寺よ。

孝夫　ん？　念仏寺？　そんなとこ行ったかいな？

美智子　はぁはぁ……お地蔵さんがぎょうさん並んでるお寺よ……

孝夫　あぁ、あの気色悪い寺かいな。無縁仏ばっかりの。

美智子　はぁはぁ……孝夫さん文句ばっかり言うてんと、ほら、だらしない。

美智子、孝夫を振り返り手を差し出す。

孝夫　……

美智子　私引っ張ってあげる（傘を捨てて、手を差し伸べる）

孝夫　……（その手を握り、美智子の前をゆく）

美智子　……孝夫さん、誓ってね。

孝夫　ん？　なにをや？

美智子　私も誓うから、お父ちゃんお母ちゃんに誓ってね。

美智子、客席を見渡し、そして立ち止まる。

美智子　この苔だらけのお地蔵さんの中に死んだお父ちゃんお母ちゃんがおるん

孝夫　え？

孝夫、美智子の離した日傘を拾う。

美智子　（しゃがむ）私ら一緒になりますって言わんと。孝夫さんの親御さんにも挨拶せんと。（虚空に手を合わせ、ぶつぶつと祈る）

孝夫　……

美智子を見ている孝夫は、客席を見て

孝夫　山の西側にあるその寺は、早くに日が暮れていきました。山の方を見上げると、影に染まった深緑をした木々が大きくうねってました。

その影は数千体のお地蔵さんの中にいる私らの方にも伸びてきました。これから京都の町は夜に向かっていくんです。

美智子　孝夫さん、

孝夫　ん？

美智子　ずっと私と一緒にいて下さいね

孝夫　……

美智子　ほんまに。

孝夫　私は美智子を見ていました。

山を見れば、緑はどんどん、どんどんと黒くなっていきました。

これからやって来るあまりにも不確かな、将来に、自由に、私はただただ興奮をしていました。

おわり。